



かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

[http:// kanadean.net](http://kanadean.net)

mail: ryukeiji@kanadean.net

凡 夫

【つまらない人】

本年度の宗祖親鸞聖人報恩講は、天気こそ冷たい雨になりましたが、ご縁をよるこぶお念仏の仲間にお参りをいただき、おかげさまで和気藹々とした「親さまのご法事」らしいご法要を勤めることができましたことありがたく、心より御礼申し上げます。

当山の報恩講は毎年、北海道と逗子分院のそれぞれでお勤めしています。今年はその両方のお説教で、別々のご講師から、【つまらない人】の意味を問うお話をお聞かせいただきました。

* * *

奏庵の報恩講では、甥の大阪仏光寺派住職に法話をいただきました。

作家・司馬遼太郎氏の没後、残された数多くの資料を整理しまとめていく作業の中で見つかったものによって、甥の寺の先々代住職が、司馬遼太郎氏の旧制中学時代の国語の恩師だったことがわかりました。それは浄土宗新聞『佛心』によせられたコラムで、ある日の古文の授業で、「凡夫」ということばを習った少年の心に残った鮮明な記憶と感銘が書かれてありました。

ある日の授業で、「凡夫」という意味を問われた生徒たちは、辞書か虎の巻でおぼえた通りに、「普通の人です」とか、「心が曲がっている人」とか、「煩惱に束縛されている人です」などつぎつぎに答えたが、誰にでにでもわかるような言葉の答えを聞きながら、先生はずっと黙っておられる。ついに、なぜそれらの答えが気に入らないのかわからないでいる自分が指名され、答えに困って咄嗟に「つまらぬ人、です」と答えた。先生はそれを一旦黙殺されたが、すぐにいつもの独特なものやわらかな威厳をもって、「凡夫とは、われわれのことやな」と言われた。教室は、しんとしたが、先生はすぐ照れて、次の課題にすすまされた。このときの光景が、色彩と音響とともに生涯忘れ得ぬものになった。

…凡夫とは、われわれのことやな…。という一語に、人間とは何者であるかが、おぼろげながらにわかった気がした。もしこの情景がなかったなら、私の思想はもっとちがったものになっていたかもしれないほどに、私にとって重要なものになってしまっている。

という少年時代の司馬遼太郎氏の思い出の文章を引用したお話でした。

その前の北海道の報恩講で、

「つまらない」の漢字は「詰まらない」と書き、自分勝手な考えでいっぱい、それ以上何も入らない、詰めることができないことをいい、聞く耳、受け入れる心を持たないことであると聞かせいただいていた。

この二つの重なるお説教を聞きながら、上方落語の「八五郎坊主」を思い出していました。

風来坊の八五郎という男が、「つまらんものは坊主になれ」と言われ、お寺に出向いて、あっけらかんと頭を剃ってもらい、「法名」をつけてもらって帰ってくるのを、おもしろ可笑しくした話ですが、自分こそ、八五郎坊主【つまらんもの】であったと味わい直しました。

「何回も聞いた…」、「もう知っている…」などと思う。その上、自分は違う、特別だと思いたい。それが、「凡夫=つまらない(詰まらない)人」だったのです。「どうせ私は凡夫だから」と、単に自分を卑下してみせて開き直りにつかうのではなく、仏法に照らされて、自己の愚かさ気付かされた自分あつての「凡夫」です。親鸞聖人は、師と仰がれた法然上人の「愚者になりて往生す」の言葉を生涯大切にされたのです。

今年もお参りいただき、お聴聞下さいまして、ありがとうございました。合掌

奏庵年末法座

日時
12月26日(金)
午前11時

「真宗宗歌」
正信偈
法話
ご文章拝読
「恩徳讃」
～*～
おとき

今年も押し迫り、冷たい風が気忙しい思いをよけいに募らせますが、人生は「苦」であるという言葉にうなずきながら、一步一步と歩んできた一年が、ありがたく愛おしく思える時季でもあります。

おかげさまで今年も無事年末法座を迎えることができますこと、毎月この階段を上ってお参り下さいました皆さま、ご懇念をお寄せいただきましたすべての方々のおかげと心より御礼申し上げます。

早や一年の締めくくりです。どうぞ足元に気をつけてお参りいただきますよう、お待ちしております。

年回忌法要表

年回忌	没年
1周忌	平成26年
3回忌	25年
7回忌	21年
13回忌	15年
17回忌	12年
23回忌	5年
(25回忌	2年)
27回忌	平成元年
33回忌	昭和58年
37回忌	54年
50回忌	42年

地方によっては、25回忌を23回忌と27回忌に分けて行こうともあり、百回忌以降は、50年ごとに行うのが慣習になっています。いろいろな事情で該当年月に行えなくても仏様に災いが及ぶようなことは決してありませんが、ご法事は亡き人(仏様)のおはたらき、尊い仏縁です。大切にお勤め下さい。

真に愚か者と気づけば
人の教えを聞く心になる

暁鳥 敏

わが身を見つめて
静かに聴聞すると
本願のいわれが
聞こえてくる

曾我量深

どうぞお元気で、また
来年も、お参り、お聴聞
下さい。よいお年を!!

今年も暮れていく。年々月日の過ぎる早さをひしひしと感じる歳になり、「青年老いやすく…」を実感するにつけ、この言葉を残した先人たちも「この道を生きていたのだな、ご苦労さんだった」と偲ぶ。それは、とりもなおさず、自分ではなかったという慰めであり励ましになっている。■幼い頃の年末年始の凜とした雰囲気は味わえなくなったが、「ひとつ歳を重ねた…」という感慨をもつ季節であることは変わらない。それは、我々のようにやっと一年をやり過ごせたという思いあり、若くても大きな病や怪我を克服したというような思いの人もいるだろう。育ち盛りの子供を持つ親にとっては、成長ぶりが嬉しい歳月であっただろう。■こういう思いは基準や理由はつけない方が真実だ。それこそ自分なりの「ありのまま」を受け入れて喜ぶことのできる感性、今「いのち」あることへの思いというものを、人それぞれに抱かせるようなこの時季の雰囲気大切にしていきたいと思うが、巷には律したものが失われていく気がしてならない。伝統というものの「こうするもんだ」は、「こうして」いってこそ、洗礼され培われてきた日本人の感性だったのにと残念に思う。■先日亡くなった高倉健さんの座右の銘は、比叡山の阿闍梨・酒井さんから教えられたという、浄土真宗でも親しいお経「讃仏偈」の一節、「我行精進 忍終不悔」で、彼は「往く道は精進にして、忍びて終わり、悔いなし」と自らの俳優人生に重ねていたという。我々は「ねがい果たさんその日まで、しのびはげみて悔いざらん」と教えられてきた。その「願い」とは「仏になる」ということだ。「しのび励んで」下さっているのは、我々凡夫、あらゆる衆生が仏になれるようにとの菩薩の行なのだ。■今、一年を「いのち」あって終えんとし、また時をおかず新しい一歩を踏み出していくこの時季は、たとえ弱々しい歩みであっても、共に生かしてくれている、はかり知れない多くのおかげなしにはなかったことを思わせてくれる。

Norimaru

